

“
コ
ラ
ー
ジ
ユ
”
から考える



パウル・クレー 《アフロディテの解剖学》 ※3月18日のみ、常設展示室に展示いたします。

3/4 (日)

「コラージュから現代美術を考える
—ピカソを起点に—」

中井康之 なかいやすゆき

1959年生まれ。国立国際美術館学芸課長。近年企画したおもな展覧会に「もの派—再考」(05年)、「藤本由紀夫展 +/—」(07年)「アヴァンギャルド・チャイナ—中国当代美術—二十年」(08年)、「フィオナ・タン まなざしの詩学」(14年)など。

3/11 (日)

「コラージュとその現代美術における展開
—写真を中心に—」

清水 穰 しみずみのる

1963年生まれ。同志社大学グローバル地域文化学部教授。専攻は20世紀ドイツを中心とした現代音楽と現代美術。東京大学大学院博士課程中退。おもな著書に「日々は写真」(現代思潮新社09年)「ブルラモン 単数にして複数の存在」(現代思潮新社)ほか。

3/18 (日)

「切断の時代—20世紀美術における
パウル・クレーのコラージュ」

河本 真理 こうもとまり

1968年東京都生まれ。日本女子大学人間社会学部文化学教授。2002年東京大学大学院人文社会科学系研究科博士課程単位取得退学。05年パリ第一大学博士号(美術史学)取得。京都造形芸術大学比較芸術学術研究センター准教授、広島大学大学院総合科学研究科准教授を経て現職。専攻は西洋近代美術史。おもな著書に「切断の時代 20世紀におけるコラージュの美学と歴史」(07年、ブリュッケ、サントリー学芸賞、渋谷・クロード賞ルイ・ヴィトン ジャパン特別賞)、「葛藤する形態 第一次世界大戦と美術」(人文書院)など。

20世紀初頭、ピカソやブラックは油彩の画面に直接紙を貼り付ける「パピエ・コレ」によって、絵画の世界に革新をもたらしました。ほとんど同じころ、クレーは自作にはさみを入れることで、全く別の作品に仕立てる手法に取り組みます。

モネら印象派が登場して以降の19世紀半ばから20世紀にかけて、それまでの遠近法にもとづく再現的な絵画に対し、新たな表現を模索する動きがヨーロッパ各地で広がっていきます。中でも、素材を切り貼りし組み合わせる「コラージュ」の手法と考え方は、シュルレアリスムの作家たちに大きな影響を与え、戦後は、ラウシェンバーグが用いたアッサンプラージュなど、さまざまな技法へと展開を見せました。

本講座では、3名の講師を招き、「コラージュ」を巡る近代から現代にいたる美術の様相を、それぞれの視点からお話いただきます。

★常設展示室にて、当館所蔵のコラージュによる作品を展示しています。合わせてぜひご覧下さい。

時間 14:00～16:00

会場 佐藤忠良記念館 (宮城県美術館別館)
地下1階アート・ホール

定員 各回60名程度 (事前申込制)

申込 / 問合せ 申込開始日 2月1日
022-221-2114 (教育普及部創作室直通)に電話